

令和元年6月24日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01771

研究課題名(和文) がん患者の子どもと家族への支援リソースの開発に関する研究

研究課題名(英文) Development of a supporting tool for children and their parents who have cancer

研究代表者

小林 真理子 (Kobayashi, Mariko)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：70383106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：がんの親をもつ学齢期の子どもへの支援について、家庭・学校・医療機関をつなぐ支援リソースの開発を行うために、以下の調査を行った。1) 学校の支援者向けに作成した初版冊子の評価アンケートの分析、2) 高校教員対象のインタビュー調査、3) スクールカウンセラー対象のインタビュー調査。それらの分析結果を基に、がんの親をもつ子どもへの支援に際して、家庭・学校・医療機関における支援や連携の在り方について検討し、患者・家族、学校教員、医療関係者に役立ててもらうために冊子(第2版)を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子育て世代のがん患者が増えている現在、その子どもが多くの時間を過ごす学校での支援は重要である。今回作成した冊子は、初版(養護教諭・小中学校の教員、小・中学生のいるがん患者の調査を基にして作成)の評価アンケート、高等学校教員およびスクールカウンセラーの調査を含めて内容を拡充し、連携のためのモデルやリソースを提示した。学校と家庭、医療機関が連携して子どもを支えるためのツールとなること、また、がん教育実施に向けて、がんの親をもつ子どもへの配慮の参考になることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop a supporting tool which connects home, school, and medical institutions for school-age children whose parent has cancer. We conducted following surveys regarding 1) analysis of the evaluation questionnaire of the first edition booklet for school teachers, 2) group interview for high school teachers, and 3) group interview for school counselors about supporting children at school. Based on the results, we examined the ways of support and cooperation with a home, a school and a medical institution for children whose parent has cancer. And we made a booklet "When a Parent has Cancer: Supporting Children in School setting" (the second edition) for cancer parents who have school-age children, school teachers and medical personnel.

研究分野：臨床心理学

キーワード：がんの親をもつ子ども 学校 教員 スクールカウンセラー 連携による支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) がん罹患年齢の若年化および晩産化に伴い、子育て世代のがん患者も増加しており、40～50代では死因の1位、30代で2位となっている。国立がん研究センターのカルテ調査によると、2012年に初回入院した子育て世代(20～50代)の患者は1,618人、そのうち18歳までの子どもがいる患者は30%の491人、その子どもの数は777人(平均10.8歳)であった(的場,2014)。がん患者の子どもたちは、親の病気のさまざまな局面において、生活が変化し大きなストレスを受ける。親の病気に対する心配、罪悪感、予測できない不安、孤立感などの悩みを持ち、夜尿、睡眠障害、摂食障害などの身体症状、学業不振、不登校や引きこもりなどの問題に発展することがある(Kornreich et al, 2008 他)。小澤(2013)ががん患者親子を対象に行った調査では、6～14歳の子どもの49%、15歳以上の12%が、親ががんになった体験に関連した中等度以上の心的外傷後ストレス症状(PTSS)を呈していた。そこで、子育て期のがん患者に対しては、子どもも含めたトータルな心理社会的支援を提供していくことが必要である。また、学齢期の子どもはそのほとんどの時間を学校で過ごしており、学校での支援、家庭、医療機関との連携が求められる。

(2) がん患者とその子どもへの支援が急務であることから、研究者はこれまで数年にわたり、がんの親をもつ子どもへの学校での支援に関する調査(小林他,2014)を実施、並行して、学齢期の子どもと親へのサポートグループによる実践研究を行ってきた(小林,2014)。それらの調査や実践から得た知見を基に、学校での支援者向けの冊子『親ががんになったとき・子どものために学校にできること』(初版)を2012年3月に作成し、内容に関する評価アンケートを同封した冊子を学校教員、医療関係者、患者・家族に配布してきた。

#### <引用文献>

的場元弘：厚生労働省科学研究費補助金がん臨床研究事業 分担研究報告書、終末期のがん患者とその子どもへのチャイルドサポートに関する医療者の認識全国調査、2014

Kornreich D et al. How Children Live with Parental Cancer. Primary Psychiatry. 2008;15(10):64-70

小澤美和：厚生労働省研究費補助金がん臨床研究事業、がん診療におけるチャイルドサポート、平成24年度研究報告書、2013

小林真理子、神前裕子、久野美智子.：がんになった親と子どもへの学校における支援、緩和ケア第24巻、59-63、2014

小林真理子.：厚生労働省科学研究費補助金がん臨床研究事業 分担研究報告書、がん患者の子どもへのサポートプログラム日本版の開発、2014

### 2. 研究の目的

本研究では、がんの親をもつ学齢期の子どもへの支援について、学校教員や医療関係者、患者・家族を対象としたこれまでの調査を基にしながら、新たな調査も加えて、家庭・学校・医療機関をつなぐ支援リソースの開発を行うことを目的とする。主に学校での連携した支援を行うにあたって、利用可能な冊子を作成し支援モデルを提示する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 冊子アンケートの分析

2012年に作成(養護教諭・小中学校の教員、小・中学生のいるがん患者の調査を基にして作成)した、がんの親をもつ子どもの支援に関する冊子『親ががんになったとき・子どものために学校にできること』(初版)の冊子アンケート(2014年3月までに672通の回答を回収)について、内容についての量的評価、支援者の経験やニーズ、患者・家族の経験やニーズ等に関する質的分析を行った。

#### (2) 高校教員対象のインタビュー調査

先行調査(2010～2011年に、養護教諭および小・中学校教員を対象とした支援の実態と意識に関するアンケート調査を実施)に含まれていなかった高等学校での支援について、経験やニーズを把握するためにグループインタビューを行った。2017年2月に長崎県立高等学校の教員6名を対象に実施、調査内容は、がんの親をもつ生徒への支援経験、学校でできるサポート、学校内外との連携、支援に必要な情報についてであった。

#### (3) スクールカウンセラー対象のインタビュー調査

学校で子どもたちの心のケアを担当しているスクールカウンセラー(以下SC)を対象に、支援経験やニーズを把握するためのグループインタビューを行った。2017年9月に東京都北区のSC6名を対象に実施し、調査内容は、がんの親をもつ子どもへの支援経験や考え、SCにできるサポートや連携、支援に必要な情報についてであった。

\*上記(2)(3)のインタビュー調査では、実施に先立って目的および倫理事項に関する説明を文書と口頭にて行い、書面にて同意を得た。発言内容は承諾を得てICレコーダーに記録した。

#### (4) 支援リソースとしての冊子の作成

上記 (1) (2) (3) の分析結果を総合して、がんの親をもつ子どもへの支援に際して、家庭・学校・医療機関における支援や連携の在り方について検討し、2012年に作成した冊子を基に本研究で得られた知見を盛り込んで、患者・家族、学校教員、医療関係者に役立ててもらうために冊子の第2版を作成した。

### 4. 研究成果

#### (1) 冊子アンケートの分析

回答者は、男性101名、女性570名(不明1名)、平均年齢42.0歳、職業(複数回答)は教員79名、養護教諭142名、医師25名、看護師126名、心理士176名、学生・会社員29名、患者52名、患者家族14名、その他38名であった。がんの親をもつ子どもへの支援経験あり204名(30.4%)、経験なし439名(84.8%)、無回答29名(4.3%)であった。

内容に対する全体的評価: とても参考になった443名(70.7%)、やや参考になった169名(27.0%)を合わせると98.4%の高い評価であり、学校での支援に関する情報が求められていることが分かった。

支援者の経験やニーズ: がんの親をもつ子どもへの支援経験のある専門職(教員、養護教諭、医師、看護師、心理士)が自由回答した、経験やニーズに関する質的分析の結果から、教員は子どもへの具体的な接し方、養護教諭・心理士は子どもの心理や変化、医療職は子どもへのがんの伝え方に関する内容が多く認められた。職種に応じた子どもとその家族への関わり方によって、支援ニーズに違いがあることが推察された。

患者・家族の経験やニーズ: 今回の回答は患者が女性である割合が高く、子どもが幼児から中学生の間である場合のさまざまな困難が記されていた。学校と関わった経験や意見が多く、子どもの支援に際し学校との連携を深めていく重要性が示唆された。また、子育て期の患者と子どもが身近な地域で支援されることに対するニーズの高さがうかがえた。

#### (2) 高校教員対象のインタビュー調査

調査協力者は高等学校の教員6名(男性2名、女性4名)、平均年齢43.5歳(24歳~59歳)、20代の教員を除く5名が、がんの親をもつ生徒に関わった経験があり、半数は福祉教育に関わる教員であった。

がんの親をもつ生徒への支援経験: 提示された実際の支援事例について、その状況と具体的な対応を整理し話し合った。高等学校では、小・中学校とは異なり、親(患者あるいは配偶者)が学校に報告に来ることはほぼないという現状で、いずれの教員とも生徒本人から相談を受けていた。また、親の病気を理由に生徒自らが相談に来ることは少なく、不登校など事態が深刻化するまで教師に伝わらないという現状があった。

学校でできるサポート: 生徒の日常を観察し変化を察知したら積極的に声掛けをすること、親の治療中は病気や治療についての知識を共有すること、親が亡くなったあとの心理的なグリーフサポート、経済的な面(学費や進学時の奨学金)についての情報を提供すること等が挙げられた。

学校内外との連携: 高校は教科担任制であることから、担任はじめ本人に関わる教員(部活動の顧問も含め)が情報共有して関わることの必要性が挙げられた。養護教諭に相談することが多く、本人の心理的状态が深刻化している場合にスクールカウンセラーに繋いでいた。学外との連携については、病院と繋がるのが一番難しく、スクールカウンセラーに生徒本人への心理的支援と共に、学校と医療機関との橋渡しの役割を期待していることが分かった。

支援に必要な情報: 子どもの行動チェックリスト、親の病気の情報、奨学金など経済的な情報、支援の体験談、親とのかかわり方、連携できる医療・福祉機関等の連絡先等。

今回のインタビュー協力者は教育相談への意識が高く、学校内の相談システムが整っていたことがあり、高等学校での支援のあり方を検討するうえでのヒントが得られた。

#### (3) スクールカウンセラー(SC)対象のインタビュー調査

調査協力者は、小・中学校に勤務するSC6名(男性3名、女性3名)、平均年齢32.3歳(28歳~41歳)、心理士経験は平均4.5年(2年~8年)、SC経験は平均3.2年(1年~5年)、半数の3名に、がんの親をもつ子どもを学校で支援した経験があった。

がんの親をもつ子どもへの支援経験や考え: 担任教師等からSCに情報提供がなされることで、子ども本人や保護者の相談につながり、さらにSCから担任や通級の先生、管理職等の関係者に対してケースの見立てや支援方法を伝えることで、学校内で連携して支援が行われていることが分かった。

SCにできるサポートや連携: 学校での実際の対応について、親のニーズに沿った対応 SCとの役割分担 校内での情報共有 教員への心理教育 子どもの行動観察、医療機関との連携について、SCと病院心理士の連携 親との連携 つなぐ役割 連携の難しさといったキーワードが抽出された。実際に対応する上で、「SCに何を望むか具体的なニーズを聴く」「患者である親の状態を把握しながら役割分担」「親が希望すれば継続面接、子どもは見守り」等、親のニーズに沿った対応を行い、校内で情報共有を行うことや、必要に応じて教員への心理教育がなされていた。

支援に必要な情報：初版の冊子に追加してほしい項目として、教員向けのポイントをまとめたページ、保護者向けのページ、支援が得られるリソースの紹介、子どもにがんを伝える際のポイントの強調等が挙げられた。子どもの学校と親の病院との間で情報共有ができればとの意見が多く、連携の重要性がうかがえた。

#### (4) 支援リソースとしての冊子の作成

上記の初版の冊子アンケートの分析、高校教員対象のインタビュー調査、小・中学校のスクールカウンセラー対象のインタビュー調査を踏まえて、『親ががんになったとき・子どものために学校にできること-第2版-』として、初版の内容の改訂および増補を行った。第2版の作成にあたっては、初版で有用だと評価された部分はそのまま残し、新しい調査の結果を追加してページを増やした。実際例は役に立つという結果を受け、高等学校やスクールカウンセラーの調査結果から、プライバシーに配慮したうえで実際の支援例を追加した。学校と家庭、医療機関との連携に関するモデル図をより具体的に作成し、リソースとなる支援者や機関についての情報を加えた。冊子の内容については以下の目次の通りである。また、子どもを支えるための連携について、モデル図を提示した。

#### <冊子の目次>

- a) はじめに・第2版作成にあたって、
- b) 親ががんになったとき・子どもにみられる変化、
- c) 子どもの年齢に応じた特徴と対応、
- d) 子どもにがんを伝えるとき、
- e) 大きな変化があるとき-グリーンサポート-
- f) 学校での支援の現状、
- g) 学校での支援の実際(1)-小学校教員-
- h) 学校での支援の実際(2)-中学校・高等学校教員-
- i) 学校での支援の実際(3)-養護教諭-
- j) 学校での支援の実際(4)-スクールカウンセラー-
- k) 親が学校に望むこと、
- l) 子どもを支えるための連携、
- m) 学校にできること、
- n) おわりに、
- o) 関連情報

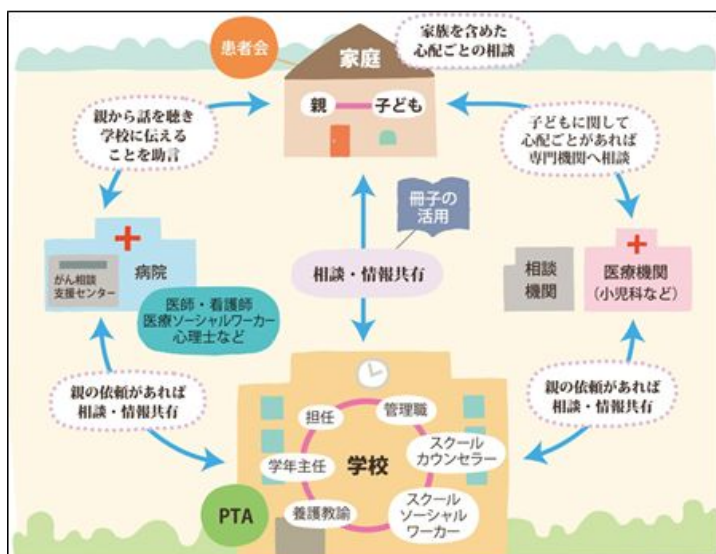


図1. がんの親をもつ子どもへの支援モデル

印刷した冊子は、医療機関や学校に配布している。また、がんになった親と子どものサポートを行っている団体（NPO 法人 Hope Tree）等のホームページよりダウンロードできるようにしており、必要な患者・家族、学校関係者、医療関係者に届くことを期待している。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

小林真理子、神前裕子、高橋都：がんの親をもつ子どもへの学校での支援の実態と意識 - 養護教諭への質問紙調査から -、学校保健研究、58(1):15-24、2016（査読有）

中島涼子、小林真理子、高橋都：母親ががん治療を受けた家庭における父親の家事や子育てをめぐる困難、Palliative Care Research、12(1) 125-130、2017（査読有）

Kobayashi M, Heiney S, Osawa K, Ozawa M, Matsushima E: Effect of a group intervention for children and their parents who have cancer. Journal of Palliative & Supportive Care. 2017 Oct;15(5):575-586（査読有）

〔学会発表〕(計9件)

小林真理子、塩田このみ：がんの親をもつ子どもへの連携による支援 - 学校向け冊子アンケートからの検討 -、日本臨床心理学会、神戸市、2015.9.20、日本心理臨床学会第34回大会論文集、pp645

中島涼子、小林真理子、高橋都：がん治療をした配偶者をもつ父親の子育て経験と対処、

第 28 回日本サイコオンコロジー学会、広島市、2015.9.19

小林真理子：がんの親をもつ子どものために学校と連携して子どもを支える、第 21 回日本緩和医療学会・京都市、2016.6.17

Kobayashi M: Experiences and support needs of mothers with cancer who have school-aged children, ICP2016 (第 31 回国際心理学会議)、横浜市、2016.7.25

小林真理子、塩田このみ：がんの親をもつ子どもへの連携による支援 学校向け冊子アンケート・患者と家族の視点から、日本心理臨床学会、横浜市、2016.9.6、日本心理臨床学会第 35 回大会論文集、pp457

Kobayashi M, Kozaki Y, Takahashi M: Support for children facing parental cancer at school: a cross-sectional survey among school teachers in Japan, 18th International Psycho-Oncology Society Congress, Dublin, October 19, 2016

小林真理子、塩田このみ：がんの親をもつ子どもへの学校での支援 高校教員へのグループインタビューから、日本心理臨床学会、横浜市、2017.11.21、日本心理臨床学会第 36 回大会論文集、pp561

小林真理子、塩田このみ：がんの親をもつ子どもへの学校での支援 スクールカウンセラーへのグループインタビューから、日本心理臨床学会、神戸市、2018.9.2、日本心理臨床学会第 37 回大会論文集、pp412

小林真理子：がん患者と子どもへの支援 親子のコミュニケーションを支える、日本心理学会第 82 回大会、仙台市、2018.9.25

#### 〔図書〕(計 3 件)

小林真理子：子どもたちの心の成長と大変なことが起こったときの反応、有賀悦子・南川雅子編『がんの親をもつ子どもたちをサポートする本』青海社、2-8、2017.6 月

小林真理子：がん患者の子どもへのサポートグループによる支援、矢永由里子編『心理臨床実践 - 身体科医療を中心とした心理職のためのガイドブック - 』誠信書房、124-133、2017.8 月

小林真理子(編著)：『親ががんになったとき・子どものために学校にできること』第 2 版、放送大学大学院臨床心理学プログラム 小林研究室発行、2019.3 月

問合せ先 email : mkobayashi@ouj.ac.jp

#### 〔その他〕

##### ワークショップ等

市民公開講演・シンポジウム「がんの親をもつ子どもへの支援 - 療養から 死別までを考える - 」長崎ウエスレヤン大学地域連携推進センターと共催、長崎市、2017.2.12

支援者対象(医療関係者・学校関係者)ワークショップ開催、長崎市、2017.2.13

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：神前 裕子(聖心女子大学・現代教養学部)

ローマ字氏名：(Kozaki, yuko)

研究協力者氏名：塩田 このみ(世田谷区教育相談室)

ローマ字氏名：(Shiota, konomi)

研究協力者氏名：中島 涼子(東京都小児総合医療センター)

ローマ字氏名：(Nakajima, ryoko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。